

キャリア教育だより

研修部 キャリア形成連携 2023/03

2022年7月から隔月でお送りしてきた「キャリア教育だより」も、今年度の分につきましては今回の号で終了となります。令和4年度のまとめとして、文部科学省が説明している「キャリア発達」と私たちが児童生徒に願っている姿との関係についてお話ししたいと思います。漢字の多い、ちょっと難しいお話になってしまいますがお付き合いください。

なぜ「キャリア教育」なのか

文部科学省は「学校における教育活動が、ともすれば「生きること」や「働くこと」と疎遠になったり、十分な取組が行われてこなかったりしたのではないか」「子どもたちが「生きる力」を身に付け、社会の激しい変化に流されることなく、それぞれが直面するであろう様々な課題に柔軟かつたくましく対応し、社会人として自立していくことができるようにする教育が強く求められている。」として、キャリア教育が必要だと述べています。そして、キャリア教育とは端的には「児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育」と述べています。他方、「子どもたちの全人的な成長・発達を促す視点に立った取組を積極的に進めること」が重要であるとも述べています。このような「勤労観や職業観を育てる」ことや「全人的な成長・発達を促す」教育は、知的障がい教育の歴史の中でずっと取り組まれてきたことです。名古屋（2013）は、著書の中で「知的障害教育はキャリア教育である」といった趣旨のことを述べています。但し、名古屋（2013）が述べている「キャリア」は勤労観・職業観などといったワークキャリアのことではなく、ワークキャリアも含めたライフキャリアのことであることを留意する必要があります。

キャリア発達に重要な「基礎的・汎用的能力」とは

上記のように、文部科学省の説明は通常の学校・学級で学ぶ児童生徒を対象としています。障がいのある児童生徒、特に知的障がいのある児童生徒について考えるときには、知的障がい教育の歴史や現状などを踏まえた解釈が必要です。

さて、文部科学省はキャリア教育で育成すべき能力として「基礎的・汎用的能力」というものを掲げています。なんだか難しい言葉ですが、どんな進路を目指すにも、どんな職業に就こうとも必要とされる能力と言えばよいでしょうか。さらに、この「基礎的・汎用的能力」は4つの能力によって構成されるとしています。その4つとは「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」だそうです。漢字で表されていることばは、漢字の意味を想像することでなんとなくわかることが多いのですが、この4つの能力っていったいどのような力なのか分かりにくいですね。文部科学省の説明によると、例えば「人間関係形成・社会形成能力」とは「多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力」と説明しています。これを読んでも「つまりどんな姿なのか」が浮かんできません。そこで、次のように「姿」を考えてみました。



基礎的・汎用的能力	各能力が発揮された姿
人間関係形成・社会形成能力	自分に合った方法で自分の思いを伝えたり、相手の意見や考えを受け止めたりしながら、他者と協力して働いたり共に生活をしたりする
自己理解・自己管理能力	肯定的な自己理解のもとに「適切な支援や配慮があれば自分にもできる」と考えて主体的に行動する
課題対応能力	示された課題に主体的に取り組み、周囲の人の助言や社会の情報を取り入れて解決しようとする
キャリアプランニング能力	「他者の役に立っている」など、有能感を感じながら「働くこと」を楽しみ、余暇も含めて充実した生活をする

※この表は、令和4年度に作成した「キャリア発達に願う姿」の案の一部です

キャリア発達の願う姿

次に、上記の表を基にそれぞれの年齢段階での姿を考えてみたいと思います。例えば・・・

「人間関係形成能力・自己管理能力」を小学部低学年の児童で考えてみると、「遊びの活動の時に、そばにいる教師に『やって』とことばや身振りで伝えたり、親しく思っている級友に近づき手を引いて遊びに誘ったりする」と、姿をイメージすると分かりやすいのではないのでしょうか。

さらに、「自己理解・自己管理能力」を小学部高学年の児童で考えてみると、「生活単元学習の中で、初めての活動に対しても自発的に取り組み、難しいと感じたときには教師の助けを求める」

「課題対応能力」を中学部の生徒で考えてみると、「作業学習のビーズストラップ作りの時、教師や仲間の『〇〇の方が色の組み合わせがいいのでは』という提案を取り入れて作る」

「キャリアプランニング能力」を高等部の生徒で考えてみると、「販売会の時に寄せられたお客さんの声を参考に、『もっとお客さんに喜んでもらえる製品をつくろう』と新製品の開発に取り組む」というような姿になるのでしょうか。



このようにそれぞれの年齢段階にふさわしい「キャリアの各能力が発揮された姿」を考えていくと、障がいの重い児童生徒の「キャリア発達の願う姿」をイメージすることもできるのではないかと思います。例えば「人間関係形成能力・社会形成能力」について、上記の表にある姿を基にイメージしてみると「提示された2枚の絵カードのうち、かけてほしい曲を表すカードを見つめて、聞きたい曲を選択し伝える」といった姿。「キャリアプランニング能力」につい

ては、「着替えの時に、わずかに腰を浮かせようとしたり不用意な力を抜いたりして介助をしやすくする」というような姿をイメージしてみてもはどうでしょうか。

このような「キャリア発達の願う姿」はこじつけのように感じられるかもしれませんが、しかし、一人一人の児童生徒が「今、ここでのキャリア」という役割を果たしながら充実した生活が送れるためには、一人一人にふさわしい「キャリア発達の願う姿」を描くことが大切だと思います。そして、その姿の実現に向けて適切な指導と必要な支援を十分に行うことが、私たちに求められているのではないのでしょうか。

文 献：名古屋恒彦（2013）知的障害教育発、キャリア教育．東洋館出版社

（文責：研修部 小川征利）

※ 文中で使用しているイラストは「かわいいイラスト素材いらすとや」のものです